

自由美術

2019・3・25



目 次

新会員の紹介

P1

小山リサ	齋藤有希子	菅野幸恵
杉本厚子	田垣内康夫	藤井聰子
古川悦子	牧田知寿子	山下由美
渡邊義實	北島裕子	山西牧喜文

受賞者の紹介

P9

自由美術賞(立体部)	中西保裕	露口実
鑾光賞(平面部)	小山雅子	的場脩二
平和賞(平面部)	藤井喜久雄	森谷連
(立体部)	辻忍	
新人賞(平面部)	小川敬子	金澤律子
	佐藤喜代子	小林顕
(立体部)	村上芳明	
佳作賞(平面部)	小野公平	辛島菜緒
	小林知里	高橋眞由美
	露木孝	田中穣
	吉田修三	吉川千里
(立体部)	石橋周子	宗伊雪

'17新人賞展を見て

P21

古川悦子さんの作品

村上武臣

菅野幸恵「色にいづ17-1」に寄せて

斎藤昇

齋藤有希子さん

森田しおぶ

中西保裕の作業の辿りつくところ

山崎史

展覧会より

P26

小作青史の世界

佐藤由喜子

全身、絵かきの人、一木平蔵

吉見博

追悼

P31

田垣内愛治さんの想い出

坂口けい子

追悼 山口武君

永畠隆男

個展・グループ展記録

P35

新会員の紹介

作品についてのこと

小山リサ



泡沫

この度は会員にご推挙いただき、ありがとうございました。大変嬉しく思う気持ちと、今後覚悟をもって作品をつくることへの戸惑いのよ

うな不安とが入り混じった複雑な気持ちではあります。

まだ自分は力量不足で描きたいものや考えが明確でない、自分の想い自体が漠然としている、ものをただ見て描いているようなところがありそれが自分の作品の弱さに繋がっていることは否めません。

自分の欠点は出来る限り直すように心掛けているものの、画面の構成・色彩等、学ぶべき課題はまだ沢山あります。

底辺ではありますが、スタートラインに立たせて頂いたような気持ちで向上心を持って、今までアドバイスを受けた言葉や物事を意識し、様々なことを吸収しながら挑戦し続けていきたいと思います。

制作について

齋藤有希子

ふだんの生活でばらけている自分が、制作のために集中すると、まるで一本の太い幹のようになる。制作は、わたしに関していえば身体にため込まれたあらゆる感覚と、混沌とした脳(そして時折あらわれる理性)とで、ひとつの作品を自立させることである。あらゆる作品にはある種の責任がある。

作家がおらずとも、鑑賞者の視界を奪う対象としての責任だ。それは、「絵の絵を描く」ようであってはいけない。

何年か前から、「大胆な構図」と作品を評さ

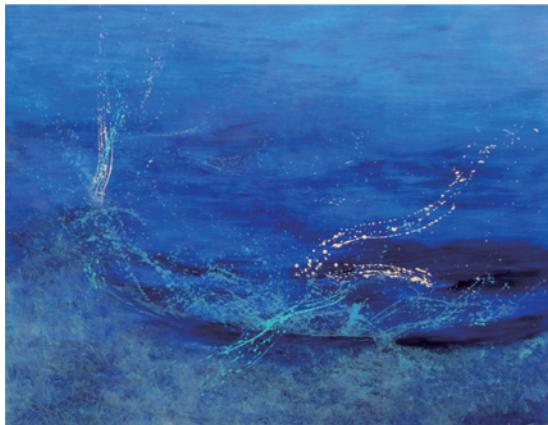


Ghost whispers

れる。「ドバッと豪快」とは友人の評。

ええい、ままよと大量の絵の具をカンヴァスに流す時、ためらわず、作品に対してある程度冷たい思いでいることがそう感じさせるのだと思う。

海のこと



色にいづ'17-02

このたびは会員へ推挙いただきまして、心からありがとうございます。

描くことは好きながらも、美術部や美術大学へ入ることなく社会人となりました。ふと油絵への憧れを思い出し、秋田市は彩画堂さんありますS先生（先生より名前は伏せてくれ！と

思えばその「ドバッ」のとき、わたしと作品はお互いの干渉から解き放たれ、作品はわたしと切り離されたひとつの存在として自立するのだ。

菅野幸恵

の懇願にて）の油絵教室の戸を叩きましたのが20代も終わりの頃でした。

風景や、手足等々描いてゆくうちに、「海」という自分自身を映し出せるテーマに出会うことが出来ました。水田のイメージの秋田ですが、実は県庁所在地秋田市は海に面しております。仕事に恋に人間関係に、躊躇した気持ちをふわっと洗い流しに行く場所が海でした。流れ・光・色、移り変わる姿を借りて今の自分を表せたら、そんな気持ちで描いております。

ご縁あって自由美術秋田に加えて頂き、東京本展へ初出品から11年。毎年、自由美術展での力強くのびやかな表現に圧倒されつつも、その鮮明さに憧れを抱き出品をして参りました。まだまだ模索中ではありますが、これまで以上に真摯にもがいてゆきます。どうぞ、今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

見る人に降りた一滴から、そっと心広がる海をいつか。

縁に感謝

『油絵クラブ』

私が油絵と出会ったのは中学校。週1回の選択クラブ授業。運動部で大声を出し走り回っていた私が何故か『油絵クラブ』を選択。

そして10数年後。

杉本厚子

「また油絵、始めようかなあ」

と家から近い絵画教室へ、クラブ活動のノリで通うことになる。しかし、そんな軽いノリとは裏腹に衝撃的なことが待っていた。

言葉では説明できない程、不思議で楽しくよ

くわからないけど凄い絵を描く自由美術の先生！

そして、教室にはあの『油絵クラブ』の担当だった中学の先生も！

絵に関してほぼ無知な私は、色々なことに驚き感動したのを覚えている。

『油絵クラブ』から『自由美術』に。
絵との出会い、助言下さる方々との出会いに感謝し、楽しく描いていきたい。



曖昧 II

思い出すことと、これから

田垣内 康 夫



東北…一瞬の刻（ただよいゆくもの）

今回、会員にご推挙頂きありがとうございます。

私は高校時に美術部顧問で自由美術協会会員の

故岡本実先生に出会いました。先生の熊野の風土に根ざし、この地域で歯を食いしばり営々と生き抜く市井の人たちを描いた作品群に全く魅了されました。とともに、高校卒業を期に「先生の自由美術」に出品するのだと心に強く定めました。そしてこの通り出品を続け、気づけば37年が過ぎていました。

「自分が生きている場、風土に根ざした絵を描きなさい」の先生の言葉に多少なりとも報いられた思いです。また「会員となって絵描きの免許皆伝」を自身の目標と定めていたこともあります。この点についても感慨深いです。

私は常に「東北大地震・大津波」のことを想っています。熊野と風土が類似しているからでしょうか。しかしそれよりも絵描きの一人として、この出来事を忘れてはならないという内なる要求であるように思います。「被災のせつなさ」を主題としつつも、その中に人の深き心と無限の広がり、そして可能性等を表現することで一人でも多くの人たちの「心に響く」絵を描きたいと切に願っています。

岡本先生が心より愛した自由美術。これからも一層自由美術に学び力量を高め、活動の場を着実に広げていきたいと思います。

最後になりましたが、大野修さん、並びに「うつなみ画会」の仲間に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

新会員になって

藤井聰子



SUMMER 1

会員推举の知らせを受けた時の喜びはひとしおでした。ありがとうございます。

絵を描くことが好きで、ずっと描き続けて参りました。退職して一人で描くことの限界を感じていた折、自由美術秋田への仲間入りができました。

自由で解放的な雰囲気の中でも制作への取り組みの厳しさが伝わって来ます。この中で安心して絵に取り組める幸せを感じました。今までの具象画から抽象画を描こうと意気揚々とキャ

ンバスに向かうのですが、考えていたようなものができません。

スケッチブックへの単純なデッサンをもとにキャンバスに取りかかります。試行錯誤を繰り返し、完成させた絵を前にすると随所に欠点が見えて来ます。少しづつ筆を加えていくうちに、もう前の絵は見えなくなっているのがいつものパターンです。

このようなことの連続でいつの間にか13年の時が経っていました。

その間には落選もありました。それも今では試練になり、次へのステップにつながったと思っています。

今、会員として迎えられ、今度こそ落着いて新しい方法を探り出し、自分らしい絵を生み出していくたいと思っております。

残された歳月を大切にしながら……。

新会員に推挙の知らせを受けて 古川悦子



地

東京の展覧会の会場で私の作品の下に「新会員」と付いていたのを見て始めは正直、何のことか分かりませんでした。まさかの出来事にただ唖然とするばかり。そのまま野見山暁治さんの講演を聞いて京都に帰ってきました。

私は永い間、書の作品を創って来ましたが

14年前から絵画を描き始めました。書を進化させたかったのがきっかけでした。始めてみると書と絵画のあまりの違いに二つの接点など見つけられないと感じました。しかし一方で、何かを画面に表現するという事は共通しているかなとも。そして今の自分の表現としては抽象なのかなと感じています。抽象って「象を抽出する」ことなのかなと思ったりします。純粋な「そのもの」を抽出して表現することが芸術なのかも知れません。自分が表現したことが見る人に伝わり、また作品に還元され、それがまた見る人にという「気」の交流ができるような作品を創っていきたいなと思っています。自由美術は友人に誘われて出品させてもらうようになったのですが、「自由」という言葉も大好きです。その言葉通り表現の自由が認められ、作品に対してシビアでの確なアドバイスもいただける良い場所を見つけたと思っています。まだまだ奥の深い表現の世界で、人間らしく生きるために精進して行きたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

新会員になつて

牧田知寿子

このまま普通の会社員で終わつていいくのかと悶々としていた20代、数年ぶりに行った展覧会である絵画と向き合った時、心が潤っていくような感覚になり、一度は諦めた絵の世界へ再び戻ることにしました。

会社を辞めて入った学校で抽象画の面白さに魅せられ、2010年に広島支部の皆様に誘われるまま自由美術に出品し、初入選することができました。

それ以降、何のために描くのかを忘れそうになるほど毎年の出品が苦痛になってしまい、もう描けないと思い悩むこともありました。このたび会員推挙の連絡をいただき、それでも描き続けてきて本当によかったです。

私の作品はまだまだ未熟で、どれもこれも一からやり直しだと思っていた矢先のことでしたので、とても驚きましたが、このままのまま描き続けていけばよいと背中を押してください

さったのだと勝手に良い方へ解釈して、また挑戦を続けていきたいと思います。

年に一度しかお会いする機会がないにもかかわらず、ひっそりと立っている私に対し、熱意をもって様々な助言をくださる香川支部の皆様をはじめ、応援してくださった全ての方々に心より御礼申し上げます。



渦流

自由美術と絵と私

山 下 由 美



祈り

会員推挙に驚くと同時に、縁というものの不思議とありがたさに想いを馳せています。

美術に進むことも無く地方に住む私にとつて、絵を身近にすることはそうありませんでした。つい昨日の事の様でもありますが随分と昔の事です。偶然入った喫茶店で目にした谷本先生の水彩画に驚き、香川支部の自由美術展を知り、そこで川添先生や市村先生の絵を目にしました。あの時の感動を今も覚えています。その後、公民館活動に誘って下さった方がいて油絵の具に触れる機会を得ましたが、「それでもやっぱり描くより見る方が好き」そんな私が細々とでも描く事を続けてこれたのは出会った方々のおかげです。心に残る絵、ふと思い出す何気ない会話やかけて貰った言葉が沢山あります。

一昨年「もっと大きな絵を描きなさい」と背中を押して頂き、昨年出品を勧めて下さった事

でまた背中を押して頂きました。「自由美術の会員に、私で良いんでしょうか?」という不安はあります。頂いた機会とご縁を大切にしたいと思っています。

今も、描き始める時はキャンバスの白さに途

方に暮れます。漠然としたイメージだけで取り掛かった絵は思ってもいなかった場所に着地して唖然としたりもします。形を追って想いを塗り込める作業から生まれる絵というものも、私にとって縁と同じくらい不思議です。

会員になって今思うこと

渡邊義實

この度は会員に推举いただき誠にありがとうございました。夢にも思わぬことでありました。

退職して間もない時期に、自由美術協会会員のお誘いにより描き始めました。中学校の美術の時間以来数十年ぶりのことでした。絵画教室の仲間に支えられ楽しく制作に取り組んできました。その間、教室の絵画展、県の美術展覧会などに出品し、未熟な作品ながらもご覧いただくことに気持ちの高まりを覚えたものでした。

出品の機会は中央展へ広がり、数年後には自由美術展で初入選となりました。初入選を機により高いものを目指して取り組み、出品を続けてきましたが、そのことを見守り続け、的確な助言をくださった自由美術秋田グループの皆様には心より感謝を申し上げます。

ある美術展で作品に添えられた作者のコメントに目がとまりました。「本来表現とは命を吹き込むほどの丁重な行為である。」というものでした。楽しみながら絵を描こうという考えは大切なことと思うが、それだけでは浅い考え方だと気づかされたコメントでした。

ここ数年東北の巨樹をモチーフにしています。数百年から千年もの間生きてきた巨樹の前に立つと途轍もない生命力を感じるとともに畏敬の念をもちます。巨樹から感受したこれらを表現することは制作する本質に少しは結び付くことかと今は考えています。会員の皆様からご指導をいただき、絵を描くことの本質を少しでも掘り下げることができたらと思っています。



千年樹III

あの日のこと

北 島 裕 子



光の旅 A

9月6日

夢の中で大きなトラックが近くを走っている
あわててラジオをつける
緊急地震速報音が鳴り続く
まくら…

ブラックアウト

外に出てみた 星がこんなにも輝いている
美しい夜空を見上げて ほんやりと考える
今年は出品できないなあ と思うと気持が
落ち込む

やがて太陽が当たり前に昇り
朝焼けが美しくて色々なモノが見え始める
その事が只々嬉しかった
また色に元気をもらっている
遠くの方で光を振っている人がいる
「無事なら合図して！」だろう
マルを何度も描いた
この度は会員に推薦を頂きありがとうございます。北海道支部の先輩に支えてもらいながらもっと描かなくては。
これからも宜しくお願ひします。

新会員になって

西 牧 喜 文

私は長く日本画の土俵で活動しておりました。たびたび行き詰まってくれず、結果では制作が苦しみの種となって迷走しておりました。

以前より自由美術の作品に大いなる影響を受けるものがあり、その力強さに憧憬しておりました。

私は今回を期にカテゴリーの呪いから解放され、自分の画面のみを信じて描いてゆける事を自らに期待しています。

宜しくお願ひいたします。

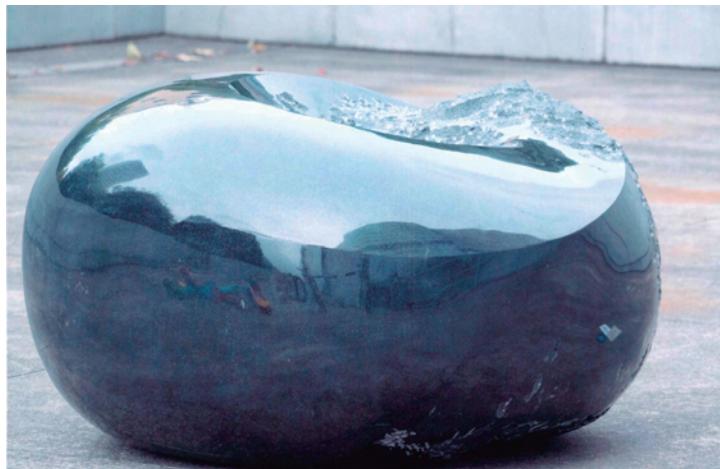


relic

受賞者の紹介

作品と向き合い

自由美術賞 中 西 保 裕



潮流

美術館での出展準備を終え、懇親会会場への移動等で慌ただしい中、受賞の知らせをいただいた時は実感が沸いてこなかった、というのが正直な感想だが、時の経過と共に受賞の重みを感じ、身の引き締まる思いだ。

本年度は新会員として昨年以上の作品を、というプレッシャーを少し感じながらも、年明けには次回屋外会場での展示のイメージが頭を過ぎる日々であったが、前回の抽象作品よりも新たな表現が出来るのではという構想を思い描けても、迷いも多かった。そんな中で今回の制作については、関西で共に活動している京都支部の山崎さんの助言が大きい。「職人的な技法は作家の技法とは内容を異にする」と言われた言葉の意味を何度も思い返し、「自分らしさとは」という答えを見つけ出すのに悩み、多くの時間を要した。

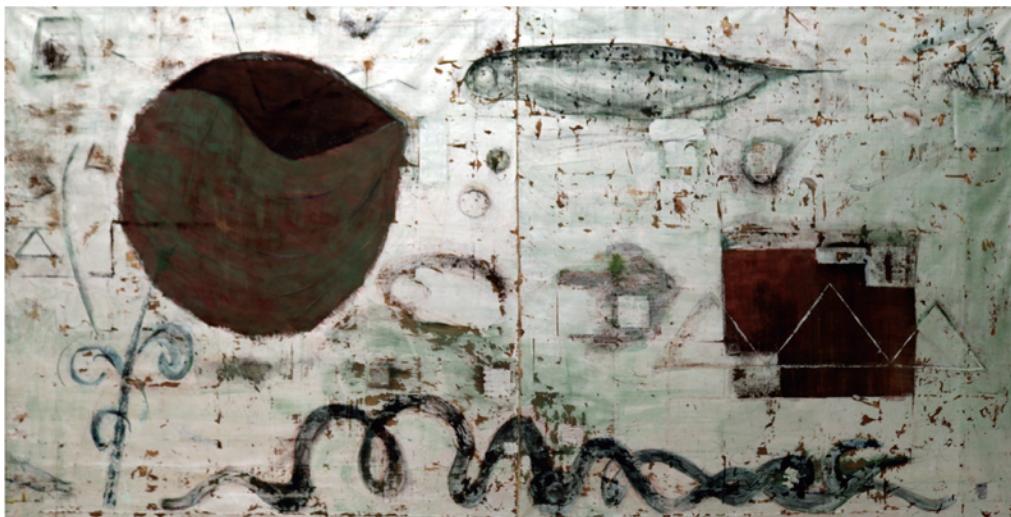
私の制作過程は石材を切削加工する前に、油土での原型作りから始まる。そこから石膏でマケットを作り、それを基に原石から切り出して

いく。加工には鑿と石頭を用いるのだが、使用したインド産黒御影石は御影石の中でも最も硬く、油断すると先端に超硬が埋め込まれている鑿が新品からすぐに折れて使い物にならない。その割に無造作な力加減だと大きく抉れ、表面研磨の時にはこの亀裂が仕上げの作業時間を多く奪う。石の破片は鋭角で作業場内に飛び散り、ベニヤ板なら突き刺さってしまう程。時には額に当たり、絆創膏を貼りながらの作業となることもしばしばである。今回は黒石の特徴の鏡面を生かした作品に仕上げる為、表面に出来るだけ研磨加工を増やしたのだが、夜の水銀灯の光で完璧と思って終えても、翌朝に見ると傷だらけでまた一からやり直し、といった苦労も多かった。

作品と向き合い、限界という妥協を振り払いながら、僅かな曲面と曲線を指先で感じ取り、素材の魅力を引き出せた時、作品が光り輝くことを学んだ今回の制作を基点として、今後更に努力していきたい。

鑾光賞をいただいて

鑾光賞 小山雅子



波動

自由美術の鑾光賞に選ばれたこと、ほんとうに驚きました。私の作品を、心のどこかにとめてくださったこと、うれしく思いました。ありがとうございます。

日常はパソコンとにらめっこ、カタログ（機械関係）を相手に仕事をつづけてきました。その様なあくせくする毎日の生活の中で、絵を描くことが唯一の楽しみでした。何度も壁にあたったり、迷って筆を置いたり、苦しみながらも、進んできたように思います。そのようなとき、激励し、ていねいに指導してくださる先生方や、絵を描く仲間に出会ったことが、やめず

に今まで頑張れたのです。それに加えて、今回の名誉ある受賞はとてもありがたいことで、大きな励ましをいただいたと思っております。

今年の作品も含めて、タイトル「Mの軌跡」は、M（文字通り私自身）が感じ思ひえがいでいるものを、表現したいのです。素敵な風景、いろいろな形のものをどう表現するかで、日夜悩んでいます。白い画面がただっぴろく感じることもあります。描いていて楽しくなるときもあります。これからも、あきらめずに描き続けたいと決心しています。

靈光賞を受賞して

靈光賞 露 口 実



雨と人間

「露口さんは、趣味があって、良いよね。」
絵を描いていると、時々耳にする。
そうか、趣味か……。

「趣味にしては、全然楽しくないのですが」
「でも、好きなんでしょう？」
……好き？ なのか？

私は、絵を描く事が好きではない。
描かない人に「絵が描けて良いなあ」と
羨ましがられる程、自分が描けるとも、思った
事は無い。
むしろ、描けないストレスから逃げ回っている。

「じゃあ、やめたら？」

……そうだよなあ、と思う。

何故絵を描いているのか、正直よくわからない。
ただ、絵の為にお金を稼げば「趣味」で、
お金の為に絵を描けば「仕事」だとすれば
私の制作は「趣味」である。
甚だ楽しくない、癒しとは程遠い趣味だなあ、
と思う。

絵の事を文字にする事が、兎に角苦手なので
……
関係の無い話とは、思いつつ。

靈光賞、ただただ、恐縮。
有難う御座いました。

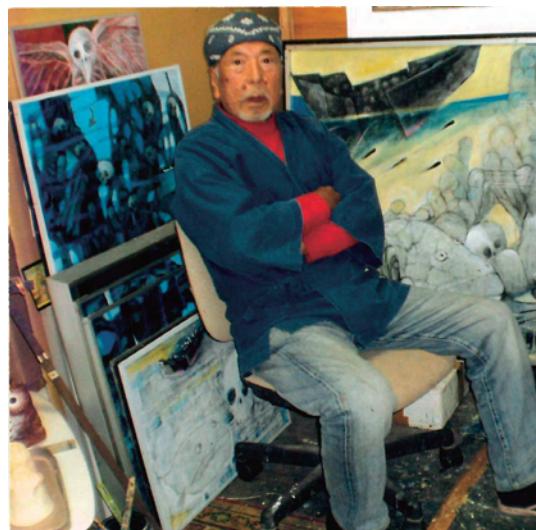
平和賞を受賞して

平和賞 藤井 喜久雄



ウミユカバ

2018年10月5日付けで「第82回自由美術展にてあなたの作品が平和賞に決定致しました。」との通知を受け取り予想もしなかった事なので大変驚きました。



1952年第16回自由美術展に初出品し落選しました。長谷川三郎氏のアドバイス「あたたかくのびのびと」が未だに描けず、描いては消し、描いては消しの毎日です。今年の出品作品は80号と従来より小さく、賞など思いもよらぬ事でした。今年3月29日で91才の春を迎え、毎日小さなアトリエで絵と向き合える有難い日々を過ごしております。

制作はキャンバスに油絵具はほとんど使用せず、アトリエで増え続けるダンボールやベニヤ板などの梱包材料を使用しております。絵の具は永年の間に溜った種々なものを手段選ばずの作画生活です。

17才で海軍を体験し、帰らぬ多くの慰靈安らかにと「ウミユカバ」を今後も続けてゆきたいと思っております。

平和賞を受賞して

平和賞 的 場 倭 二



記憶の変容

平和賞受賞されました。おめでとうございま
す。……との連絡を受けおどろきとよろこびが
……

中学校美術教師をしていた当時1988年頃
だったと思います。

自由美術に出品してみないかと勧められ、3
回程出品した記憶があります。それが最初の自
由美術との関わりでした。

その後は校務が忙しく地元でのグループ活動
だけをしていました。

教師を退職して絵画制作の時間が確保できる
ようになり2008年に自由美術に出品しました
が振り返るととても見られる絵ではなかったと
記憶しております。

2010年に自由美術に再度挑戦しました。そ

れが新人賞、会員推挙となった。

その後の絵画制作は毎日制作に打ち込み、
フォルム、色彩、リズム、造形等を考え、繰り
返し制作に励みましたが……。

突然病気で入院することになりました。入院
中は時間もあって今までの自分の絵を振り返る
ことができたと思っております。

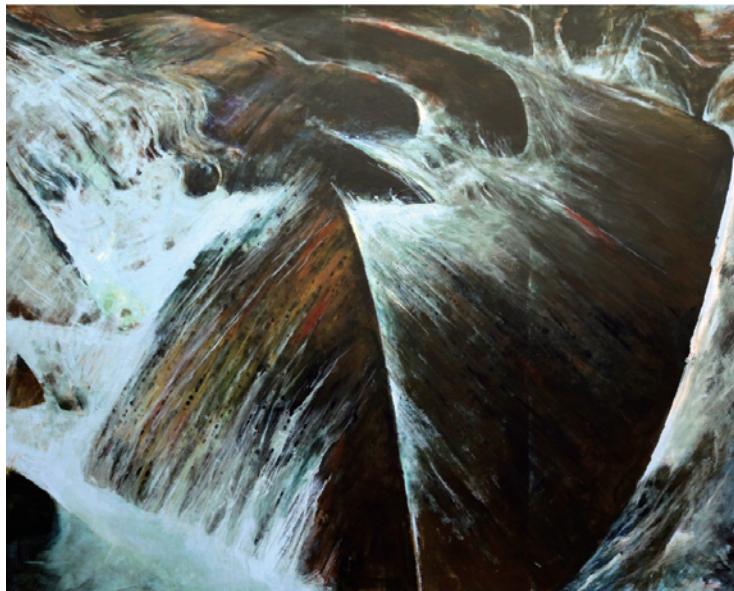
退院後、自身の制作についての姿勢を見直
し、地道に制作を続けたことが平和賞受賞につ
ながったことだと思います。

この受賞を新たな出発点として、ますます内
面を研ぎ澄まし制作に打ち込みたいと思いま
す。

今回は、おもいもよらない賞を戴きありがと
うございました。

初入選から半世紀を経て

平和賞 森 谷 連



‘18刻・
追憶の渓 II

初入選は、1967年第31回自由美術展“今日の証言”である。岐阜県小中学校教員として赴任した標高1,240m乗鞍岳と御嶽山の中間で長野県境に位置する日和田小中学校からの出品であった。公共交通機関もないへき地からの出品には困難を要し、初入選通知の報には感慨深いものがあった。

岐阜市へ転勤になった’74自由美術展“ユーマニテ”出品の「歪む」「拒む」(F60)の2点入選で会員に推挙された。翌年の中部自由美術展では私を含めて3人の特別陳列が企画された。当時の中日新聞の展覧会評には『森谷は「難民」「憂因」「充たされぬ計画」といった政治問題で動乱状態にある国と国民を扱った画面だ。問題が大きすぎるのか、作者のヒューマニズムに、その問題のどの点が深く突き刺さっているのかがはっきりしない』(原文のまま)テーマばかりが先走りする觀念的な生意気な作品だったように思う。

2000年以降、自身の作風に変化が生じたようと思う。変化の起因は“自然災害の連鎖”に

よる故郷の自然破壊にある。1986年我が故郷飛騨市は未曾有の水害に見舞われた。2002年再び飛騨市は決定的な豪雨災害に見舞われた。“百年に1度規模の災害”が、たった15年間に2度も生じたのである。2002年第66回展出品の「記憶の渓 I」(F100)は、それまでの作風の転機となった。

縄文人遺跡も点在し、古来より豊かな自然に恵まれた地形が、渓谷や河川の氾濫、崩壊により失っていった。以来望郷の念とともに自然の猛威に対する畏敬の念を強く抱きつつも、今年の“自然災害の連鎖”に代表されるように、地球上の人間の驕りが地球温暖化をはじめとする諸現象を生んでいるように思われてならない。

最後に、今回の“平和賞”受賞は私にとってこの上ない栄誉で望外の喜びである。今回の作品は画面中央の半円状の形が最初に決まったが、構図が平板でしつくりこなく出品間際まで描き直しては消しの繰り返しであった。最後に画面右側の岩を大きく傾けたことで動きが出た。

彫刻のぜんたいとかかわりについて

平和賞 辻 忍

これから彫刻する木に向かい合うとき、そのぜんたいは霧の向こう側に見え隠れしている。彫り始めることで、その木とかかわることになるが、刃物を入れることは、僕にとって逆に木とのかかわりを絶つことになる。

かすかに見えていたはずのぜんたいは失われ、かかわることで行方が見えなくなる。かかわりとは、厄介で難しいものだ。

木は、こちらがかかわらなくても過不足なくただそこにある。かつて根を張っていた世界とは、そのままの姿で自然なかかわりを持っていたはず…。彫刻はあえてそこにどうかかわろうとするのだろう…。自生していた木の樹皮を剥ぎ、年輪や植物としての繊維を断つことから始まる行為。

かかわりを失いながら、でもその木の中からいくつかの形があらわれてくる。いくつかの形は無関係のようでありながら、どこかにかかわりが生じている。見失っていたぜんたいが微かにあらわれてくるようだ。だが、次のかかわりで一瞬の内に消えてしまうことが多い。

ぜんたいには得体の知れない魅力がある。かかわろうとすると、遠ざかり失われてゆくことがあったとしても…。かかわることは絶つことに等しいとしても…。



みどろきはじめに



重なりから

新人賞

'18年受賞者による新人賞展は'19年10月2日(水)～10月14日(月)
国立新美術館(自由美術83回展と同時開催)

小川 敬子

寂 光



村上 芳明

精霊たちのレクイエム II

佐藤 喜代子

アフリカの幻想 B



小林 顯

大 空 へ



金澤 律子

The earth (I)



佳 作 賞

高橋 真由美

美味・色取り



吉田 修三

スタンプ1

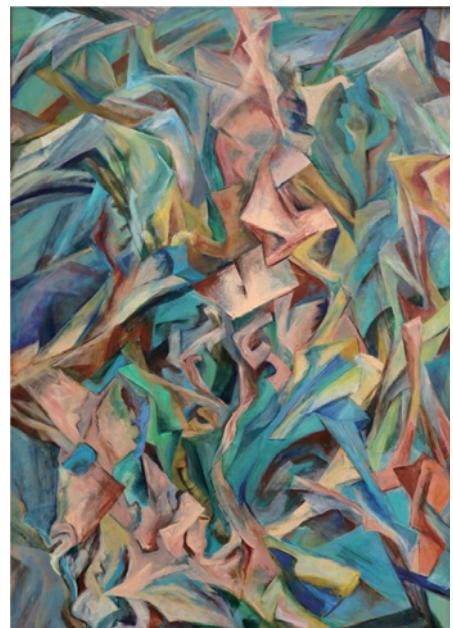


松浦 皆子

宙・流・木



小野 公平 高い処に昇りたがる



露木 孝

カロケの丘



小林 知里

in the mountains



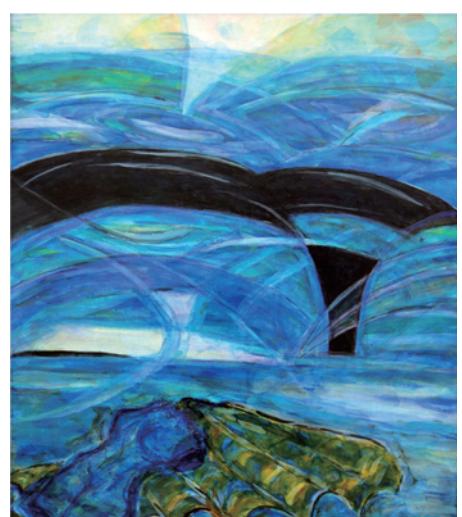
田中 穂

難破船炎上



後藤ユリ子

海に眠る



辛島 菜緒

D N A

吉川 千里

幻 影



宗 伊雪

She



石橋 周子

終の果て



2017年 新人賞展を見て(‘18本展と同時開催)

古川悦子さんの作品

村 上 武 臣



古川悦子さんは京都府出身で、自由美術に出品されたのは最近の事で出品3回連続入選で而も新入賞を受賞するという希有な存在にあり、更に今年82回自由美術展で新会員に推挙されました。

作家の作品に注目したのは、2013年京都市美術館での関西展の作品がひどく印象に残っていて自由美術展への応募を打診した所その際に明確な返事はなかったが期待をしていました。

作品は京都の作家にはかつて拝見した事が無い個性的な手法での抽象画で、素材はアクリル絵具を駆使し斬新かつ繊細な画面は多くの共鳴者を得た記憶が残っているのだが、その原点は

多彩な制作活動の中作家は書道も嗜むとの事で、手法の一つ前衛的な書風で太い毛筆に混ぜ合わされたアクリル絵具をたっぷり含ませキャンバスに構想の「字」を描きエスキースを構成し両面を制作して居るのではと想像する所である。

今回の新入賞展に展示された
「アナザーワールド」「非在」

想定と同じ手法でしっかり塗り込められた生地に軽快な筆の運びで抽象化されたフォルムで画面構成された形態を基準に、赤、白、青の色を垂らした様な所も新鮮で鮮かに処理されているきれいな画面が作られている。

よく両面を見ると面相筆一本を使って等間隔で線に神経を集中して流動させながら決して交差しない様に描く技法は作家独特の技を確立している。このモチーフが作品の丁寧さと深さの決め手と成って居ると感じる。

「醸（かもす）」

曖昧なフォルムの構成と淡い色調で画面の訴えが弱い点が気掛かりなところだが、垂らされたブルーの偶然の形と丁寧に描かれた独特的の線が面白く組み合わされていて魅力的な両面が生まれている。

画面から作家の意図する所は何か、「醸（かもす）」と言う画題、哲学的な物の見方が有るのか（物議を醸しだす）（創出する）（元通りに

する）、種々考えられるが答えを出すにはもう一度作品と語り合うしかないのか。

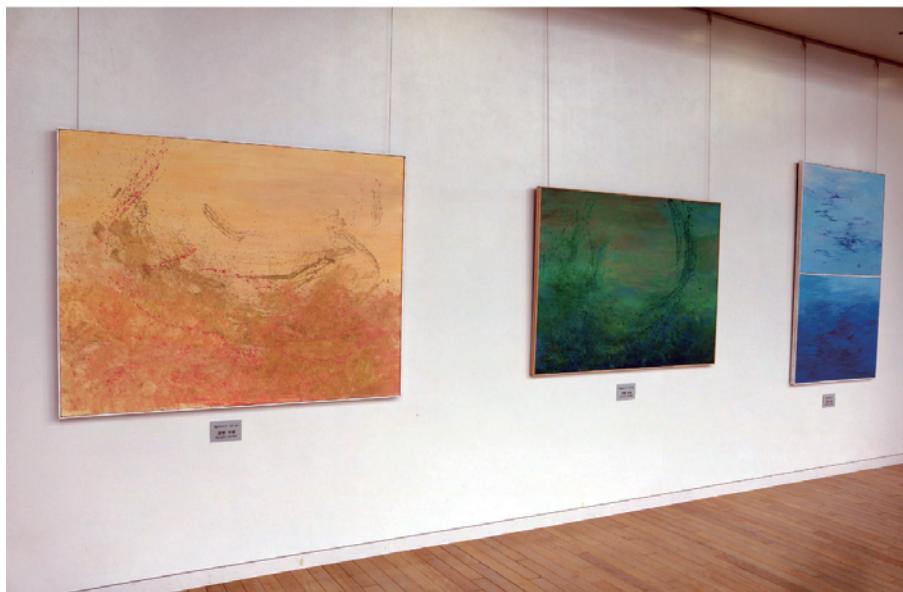
「地」

面相筆で根気よく繊細に作られた画面の中に大胆な湿地を思われる赤い土のマチュエールが中心に位置し、力強くたくましさを感じさせて好感がもてる。周囲のグリーン、ブルー、イエローも鮮かで中心の赤のゾーンとのバランスも良好で魅力的な作品である。

作家にとってはこの近年に発表された作品が順風満帆結果が出せているが、今後も納得のいく作品を出して行くにはどの様な形が醸し出されるか、又どの様に展開していくか期待したい。

菅野 幸恵 「色にいづ 17－1」 によせて

斎 藤 昇



危うさを伴った爽やかな一陣の風……春夏秋冬・人生の機微、すべてに反応する感受性の鋭さ……、いわゆる癒し系の作家……という評価

がこの人の今までの制作の前提だったと思っているが、それを更に一步前進させてくれたものがあの「アニサキス」という寄生虫（刺身の

中に潜んでいた) だったのだから何やら笑ってしまった。

本人は激痛に七転八倒ものだったらしいが、その怨み辛みをキャンバスに思いきりぶつけた事が行きづまっていた壁を見事に打ち破ってくれたのだから、むしろ救いの神のようになった。

醍醐イサム氏の長い時間と情熱を続けてきた白黒の仕事に、こんなデッサンの勉強の仕方も

あったのだと日頃感心していたのだが、ここにこそ新しい道が、アカデミックなデッサンでとらえた自然描写じゃないもの……豊かな感性でとらえた日常性の中のエキスが実体となって、そのリアリティが見る人の心を動かす作品が生まれてこないだろうか。とこの新人賞作家に期待したい。

齋藤有希子さん

森 田 しのぶ



昨年の春、行きつけのギャラリーのオーナーから『面白い若手作家のグループ展をしているので見に来ませんか』とお誘いがあり、早速会場でお会いしたのが齋藤さんとの出会いであった。

正面にS80号と大作が並び、透明感あふれる色彩と力強く主張する何か、そこはかとなく深い空間を、私は吸い込まれる思いで拝見した

ことを記憶している。

その日彼女は当番だったのか、それとも自作に対しての責任感だったのかは定かではないが、作品の前に立ち、特異なまでの真剣さを直感した私は、思わず『自由美術に出しませんか?』と声をかけた。

彼女は軽い気持ちで返事をすることはなく、数日後に返事を頂いた。

大阪生まれ鳥取育ち。京都造形芸術大学院を卒業し、現在家族三人で鳥取に居を構えている。何ゆえに鳥取かと聞くと、絵を描くために広い場所が必要だったという一言だった。家庭を守り幼稚園のお子さんを丁寧に育てながらという中で、絵画に対する意欲は力強く、奥深い信念を持っている。本当に絵を描くこと、表現することが身体からポロポロと溢れてくるのだと、私は話を聞いていて思った。

日常的な経験あるいは瞬間に起こりうる出



中西保裕の作業の辿りつくところ

山 崎 史

中西保裕さんの仕事に出会ったのは4年前、79回自由美術展に出品した石彫による人物作品だった。鑿あとに破綻のない確かな技術とやさしさのこもる表現に心を惹かれたが、造形的な魅力に欠ける素朴な仕事だった。翌年、この仕事は大振りになり2体の人物が併せて並ぶも

来事であったり、又会話の中のひとこま等々、頭と身体とが流動する中での作品化という、一種独特である自閉的な位置づけを作品化するよう心がけていると話していた。

これは作品に対して自立してほしいという願望と責任でもあるという。

彼女の制作は筆を使ったりナイフを使うことを一切排除し、むしろその行為にとどまることを否定した独自の表現方法として、絵の具を無造作に無責任にも見えよう方法としてバシャーと面面に投げる行為の中での作業となる。これは、自己と画面との一瞬の最高の緊張感で（頭と肉体とキャンバスとの融合の瞬間である）たとえば、スケートボードの選手がジャンプする一瞬の最高潮の瞬間の緊張が彼女の求めている方向性である。

彼女の自然的な行為は作意を感じさせない無限大の空間である。つまりは、間接的なものを究極にまで排除することにより、画面は力強く自然的な透明感と世界観により一層深く染み込んでゆく。そして彼女は今、色彩とは何なのか、色の持つ可能性に誤魔化されない、頼らない、という大きなテーマに向かい自分を究極にまで追い込み、絞り込みながら次の作品と向き合っている。躍進し続ける彼女の今後の作品が楽しみだ。

のとなった。2体のオブジェは合わせ目も正確で、台座の4辺の割りあとは達者な技術に支えられていた。台座を含めて3トンに及ぶ仕事は労作ではあるが主題は甘く満足とはいせず、造形的な弱さは四隅の反応を見て作者は敏感に悟っただろう。その中西さんの作風が81回展



で大きく様変わりしたのは何故かという声が聞こえてくる。中西さんの表現の変化について考えてみたい。

中西さんは南河内の石屋である。家業を継ぐため香川県庵治町の石工の修行に出された。19歳だった。親方は30過ぎの腕のよい職人で不愛想、ぶっきら棒だったが、仕込みは徹底していた。与えられた作業は単純無比で、簡単な形を早朝から日暮れまで1・5キロの石頭（ハンマー）と石鑿を与えられて石を叩くことだった。わずかな休憩と昼食時以外は休むことは許されず、血豆が潰れて化膿し石頭の柄はみるみる汚れたが包帯も軍手を履くことも許されなかつた。3ヶ月経って親方に腕を掴まれ引き寄せられた。「いい手になった。これがお前の一生の宝や」と言った。血豆のあったところには新しい皮が育っていた。1年半程で修行は終わり、基本的で確実な石工の技術をここで手に入れた。

それから30年以上にも亘って中西さんはそ

の手で石を叩いて碎いてきた。仕事の大半は墓石や手水鉢などで簡潔な幾何形体だ。形や大きさこそ違え墓石は概ね立方体であり、しばしば円形や球体を彫る。石の組み合わせも格別に奇をしてらうことはない。慣習に従った日常的な作業の繰り返しだ。『表面の凹凸や歪みは目で見て判れ、腕を使って勘を磨け』親方の言葉が脳裏をよぎる。磨きもまたそうである。手抜きをすれば鏡面に映る自分の顔が歪んで見える。中西さんの野外彫刻に映る風景が美しいのは手を抜かないからである。磨きを含めた立体による構成力はこうして養われた。

中西さんの仕事は次第にあるべき経験のもとに収斂している。無理のない自然な営みとして石を彫る。何を作るかではなく、如何に作るかが命題となってきた。墓石の無機的な立方体を触りながら、その表面が意識の中で膨張したり収縮したりするとき中西さんの新しい作品が息づく静かな音が聞こえる。

展覧会より

小作青史の世界

佐 藤 由喜子

天地創生 小作青史 油彩展

2018年11月5日(月)～30日(金) 彩鳳堂画廊



無 題 40F

昨秋、久しぶりに小作氏の油彩画に焦点を当てる個展が彩鳳堂画廊で開かれた。

「天地創生」というテーマである。

小作氏は自由美術への出品は油絵であるが、国内外の版画関係の受賞の多さから版画の世界でも有名であるが、1991年に、いわゆる銅箔キャンバス・ルネッサンスを展開させ日鉱ギャラリーの会場で制作するという画期的な表現を行った事でも知られている。

(銅箔キャンバスとは、油彩画の支持体として銅は最高と言われ、16～17世紀に描かれたものが鮮明に残っている事をふまえ、開発され

たキャンバスである)今回の個展でも3点あり銅箔キャンバスならではの明るさ、透明感のある美しい色彩を放っていた。麻キャンの作品は下地が感じられる様なマチエール、強弱のありようが豊かな表現力として伝わってくる。有名な壁画を思い出させる様な緊張感。デフォルメされた人物、不思議な生き物達は何処から来るのか?「ある時動物園へ描きに行き、そこを出ようとした折り、ふと、どんな動物をどの様に描いても自由でいいのだと何か解き放たれた様な気持になった……」と

以前、竹橋の近代美術館で野見山暁治氏の個

展で偶然小作氏とお逢いした。「忙しくしていいて、中々人の個展を見に行けず申し訳ないが、この人は、はずせない！」との事だった。小作氏は仕事の虫、と誰か言つた。

今でこそ大学に版画科があるが、小作氏が学生の頃は無く、たまたまピカソの石版画展があり、「何？ 石で刷る？ 作る？」と興味を持ち、刺激され、芸大二年生の頃油絵と同時に石版画

等を積極的に学び、結局、独り残った版画教室で、同級生を指導するという形で始まったとの事。リトグラフ等、版画指導の黎明期だった様子が伺われる。近年では今迄の版画技法に疑問を持ち、プレス機が無くとも刷れる木版リトグラフや楊枝バレン等身近な素材で誰でも簡単に刷れる方法を開発、提案する等、油絵の制作と共に常に新しい仕事への挑戦が続いている。

全身、絵かきの人、一木平蔵

吉 見 博

一木平蔵 - 91年の画業 -

2018年12月24日(月)～28日(金) 銀座アートホール



「投げられた風景」 2001年

木馬にまたがるのはいいとしても、それが
ペガサス（天馬）だと思ってはならない
ピエール・ボナール

91年の画集と銘打たれた展示は、広いアートホールの会場の1階に100号から100号2枚横繋ぎの大作まで8点（1980年代～2010年代）と1959年作を含む10号から50号の15点程が並び、さらに2階には130号から130号2枚横繋ぎまでの大作12点（1990年代～2000年代）

に、デッサン（下絵）、小品コーナーという見応えのあるものだった。

すでに僕たちには馴染みになった、たくさんの「風景の跡」や「遺構に立つ人」たちは、緊迫感と深い瞑想、凝縮、広がる静穏、厳しい自省力、豊麗な東洋、西洋の古典への痛切なあこがれ、先人との格闘が展開されていて、見る者の力が試される。

のびやかな開放弦の音色にデリケートなピチカートが重なるような筆触は、色彩をどう塗るかという至上の名人芸だ。画面に近付いて触りたくなる。そのもので醜い色というものはなくて、色彩の相対的な関係性の関心は、無神経な「人」や、「こと」への怒りにも似た否定、まさに一木さんの言う「腐心の時」の中に作家は棲んでいる。

どうやってここまで「自作を他人のそれのように突き離す」(一木さんの言) ことができたのか。作者が品なく画面上でもがくことなく、「嫉妬深い美の神様」(一木・同) が天上から降りて来てパイプオルガンの重奏音のように溶け合うまで待っていたのだろうか。

入口左の大作の並ぶ部屋から、F130号グレーと緑の「風景の跡」が始まり一連の大作は続く。いずれの作品もそうなのだが「重心を上に」(同) という狙いが分り易い。形態で上を重くできない時には、最上部には厚い絵具を置き、下方は、奥行きを持たないように薄く軽く、他を邪魔しないように注意深く下降する。やがて画面全体は斜めの動きを持つ形によって見る人の「目」を遊動する。線は重すぎず、引きずらず、速度を変えながら快ちよく引かれる。キャンバスの縁の「辺」と並行する線はまずない。「動きが止まると絵は死ぬんだよ」(同)

時には画面の右端や左端中央部の「縁」に沿って、ベタッと厚みのあるパートが子供の掌のような面積で置かれている。決してそれ以上に「目」の動きが画面の外にまで流出してしまうないように、「止め」のように。そこから「目」は反転させられて画面全体の動きへと戻って来る。他のいくつかの作品にも共通して、このような厚みを持つ秘密の部分、あるいは方向転換を促す色彩のパートが置かれていて一木さんの考えが良く分る。「画面の縁を利用するんだよ」(同)

「縁の線」のことは、僕にとっては、方形で

あれば、描く以前にすでに画面には4辺の線が天地左右にあり、放って置いても緊張する4つの隅があると体感するまでには、実作を重ねる長い時間が要った。

「静物」「風景のなか」…そして縦100号2枚横繋ぎの「風景の跡」。「そこにはなにもない」ということ、コップの形は壊れても、その質は残るんだよ」(同) グリーンの地に不定形の白、オレンジ、紫がやはり斜めの清々しい動きを持って左右に引っ張り合う。同じタイトルの、赤と暖色系の横100号2枚横繋ぎも、左右に長く拡がる画面の緊張感に満ちている。2階のS80号横2枚繋ぎ「投げられた風景」さえも右上の白の形態と左のベージュの形態が、ブルーグレーの地の上で離れようとしながら引き合っている。レッドオレンジの「風景の裡」130号2枚横繋ぎ、S60号2枚横繋ぎの美しいグレーの変化の、その中のイエローオレンジとブルー。気力の充実した鋭い閃き、闇達さ。決して冗舌ではない遠心力と求心力の拮抗だ。

これらの大作を見ていると、僕は桃山期の障壁画を連想してしまう。

ある時、海北友松をどう思います? 「松に宿鳥」や「松に孔雀」とか、描いていない広い面積の、時を経た質が素晴らしいんですけど。俵屋宗達は? などとも尋ねたり、絵の話しかしない一木さんと気付くと、日本橋から新橋まで歩いたりしたものだ。東洋、日本画では? と聞くと「うーん…牧谿だな、軽み…」だと言う。

僕はかの宗達の「蓮池水禽図」掛幅、紙に墨を見ると、一木さんの縦長の絵の構成がそっくりそのままあるようにさえ思える。上半分の蓮花と葉のフォルムは大きさを持って画面を上へ引き上げ、下部の二羽の水鳥はいずれも軽やかに、そっと置かれて、中央近くの一羽は右から左上へと向い、その視線の先の画面左上の縁(辺)には「止め」のように濃い蓮葉がはみ出していて視線を内側へ転換させる。もう一羽は

静かに左横を見ながら、右下に描かれている。力みや修正というものは全くない。

今回、数は少ないながらも木炭紙に描かれたデッサンを見られたのは有難かった。デッサンは下絵でもあり、その画面の神経の使い方はタブローと同じである。大作に向う前に小さな動機を鍛練して全体を構成していることがよく分る。この過程が絵を描く者には興味の尽きない作画の時間でもあり、一木さんには膨大な量のデッサンがあることは知られている。絵は白と黒の形が大切だと言う人は多いけれど、本当に白と黒の仕事を準備する人は少ないのでないかと一木さんと話したことがある。「そうだな…」「思いつきや一時の興奮なんていうものは頼りにならない。美の神様は簡単にはやって来なくて、我々は才能がないのだから」「構成というのは、碁盤の上に白黒の碁石を置くようなものだ」(同)

いつだったか都美術館の自由展会場の一木さんの作品の前で「オレの絵はどうだ?」と言われたことがあった。まるで一対一の試験のようなもので、見れば見る程、画面の隅々にまで行き届いた絵カキの神経に感心して、自作を背に冷汗をかくようなものだった。「オレとオマエの仲なんだから、言っていいんだよ」と言われても…ようやく、何を描くかということは強くは訴えてこないけれど、形と色彩とそれをどう塗るかということ、色面と色面の境界の扱いはすごいというようなことを話したものだ。広い面積を塗る刷毛は?と聞くと茶目っ氣を出して、100円ショップの刷毛だと言い、画面のこの部分は彫刻刀で削って出張りを取ったんだとか…画職人の話しになる。僕はアルチザンを尊敬しているんですが、一木さんは画家とか絵かきとか呼ばれるのはどうですか?「ものを造る(創る)人と言われるのが良いかなあ」(同)

ある時は、僕の個展で、この絵は油彩の上にパステルか?と尋ねられる。いやキャンバスの

織目の出っ張りの上に絵具を付けしているんです。やがて織目の奥に絵具を塗るか上にかと画職人の話しになる。もうそんなことを話せる人はいなくなった。

今回の展示作は、1990年代以降がほとんどであったせいか、ある意味、完成度の高いものであつただけに、混乱や葛藤の跡の残らないものが多かった。こんなにもグレーや中間色が多かったか… その中で、1959年作の「風化する家」F20号、「家」F15号などの作者の思考の過程や迷いの跡が見え隠れする仕事には、ああ、ここから来たんだなと想いを馳せることができる。

一木さんはいつも絵のことを考えていて「なぜ良くないのか、どうすれば良くなるのか」他人の絵でさえも気になって仕方なかった。

どうして、聞かれもしないのに、絵について言って来るのかと訝しがったり、その急所を突かれて呻いた人も少なくない。「保育園か幼稚園にでも行ってもらうしかない」(同)かつての自由美術では聞かれもしないのに舌鋒鋭く斬り結ぶのは当たり前のことであって、その中でも一木抜刀斎平蔵の切れ味は的確だったというだけのことだ。一木さんでさえ、井上(長三郎)さんに絵の前で絞られていたことがある。

僕自身は展覧会の度に、一木さんには、どうしてか、いつでも「良い」「良いぞ」と言われ続けて来た。後年、僕は若い頃、一木平蔵なんかと口をきくものかと思って来ましたよと話すと「それが良いいんだ、ヘラヘラ近寄って来るヤツらはロクでもない」(同)自作について、どうすればもっと良くなるかと聞くと「自分で考えろ」と当前のように突き離すくせに、個展の時には「良い、タマヨより良い」と甘い毒の蜜を注ぐのだった。そのうち、「ちょっと緊張の糸が途切れたな」との一喝もあったが、もう見てもらうことはなく、その絵の考え方は絵の中に残っている

比田井（希仁）さんは晩年、最近の自由美術は絵が良いかどうかでなくて、綺麗だとか、好きだとか言う。どうなっているんだ。もう絵のことを言うのは一本くらいしかいなくなった」と嘆いていたものだ。

今はもうない旧都美術館裏の「自由美術・五月展」に出品された「ルクソール」の地表を鳥瞰したかのような転換期の仕事や、一木さんと話したヨーロッパや、サハラ砂漠の地平だけの風景や、カルナック神殿、王家の墓、寂寥荒涼とした遺構に立ったことなども書いておきたかったが指定された紙数はすでに尽きてしまった。

かつて人間が生きていた場所で永遠の時間の潮騒を聴きながら、溢れ出すような愛着と何もない自然を前にただひとり立つこの孤独な自己愛は、絵の中に織りこまれて透明な空間へ拡がっていこうとしたのだろうか。

「制作中、あそこが良くない直したいと分つても、そこまで行くのがしんどいんだよ…」(同)

車椅子に乗った「ものを造る人」は最期まで、全身、絵かきの人であった。

追 悼

田垣内愛治さんの想い出

坂 口 けい子



戦 跡

このたび、田垣内愛治さんへの追悼文をとの依頼を受け、若輩ながら書かせて頂く事となりました。

思い起こせば、20年前、故・岡本実先生が1955年に立ち上げたうつなみ画会で初めて、愛治さんにお会いしました。いつも穏やかでやさしく微笑んでおられたお姿が思い出されます。

戦前、愛治さんは警視庁にて大変な任務に就き、その後戦地に赴き、沢山の辛い経験をなさったそうです。「自由とは何か」を常に考えながら、教師の傍ら岡本実先生のもとキャンバスに向かい続け自由美術展に出品、その後会員となりました。「戦跡」という作品にて、平和賞を受賞され巡回展にも選抜されました。最後の出品となった「E・T」という作品においても全国地

方巡回展に選ばれ、最後まで素晴らしい作品を世に送り出して下さいました。

決して驕らず、自由美術協会の会員であることを常に誇りその謙虚な姿勢が私達の励みとなつた事は言うまでもありません。

昨年のうつなみ画会の遺作展におきましては、愛治さんのお人柄の様に実直で、ユーモアにあふれた作品が並び故郷の素朴な風景を懐かしんだり、一方ではポップアート調の作品に多くの関心が寄せられ、「おしゃれでNYのギャラリーに合いそう」等様々な感想が聞かれました。

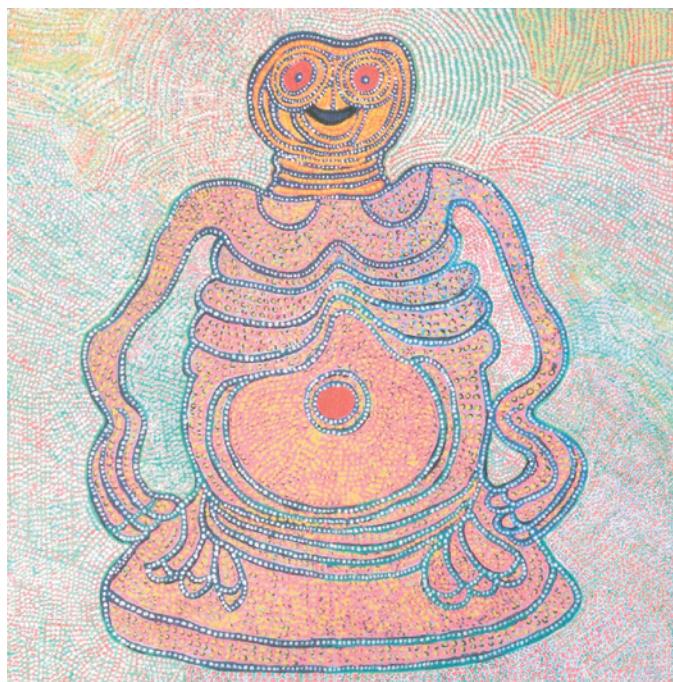
私の画室には、愛治さん御夫妻の写真が飾ってあります。自由美術展の会場にて二人並んで

いらっしゃるお姿です。いつも遠くから励まして下さる私にとっては暖かい太陽の様な存在といえるでしょう。

岡本実先生そして、田垣内愛治さんお二人の告別式におきましては、絵に対する熱い想いをしっかりと感じた事が今も心に強く残っております。

「うつなみ」という名前は、絶え間なく、打ち寄せる波のたくましさ、そしてしなやかさから自分を見失わない様にという想いを込めて、岡本実先生が名付けたそうです。

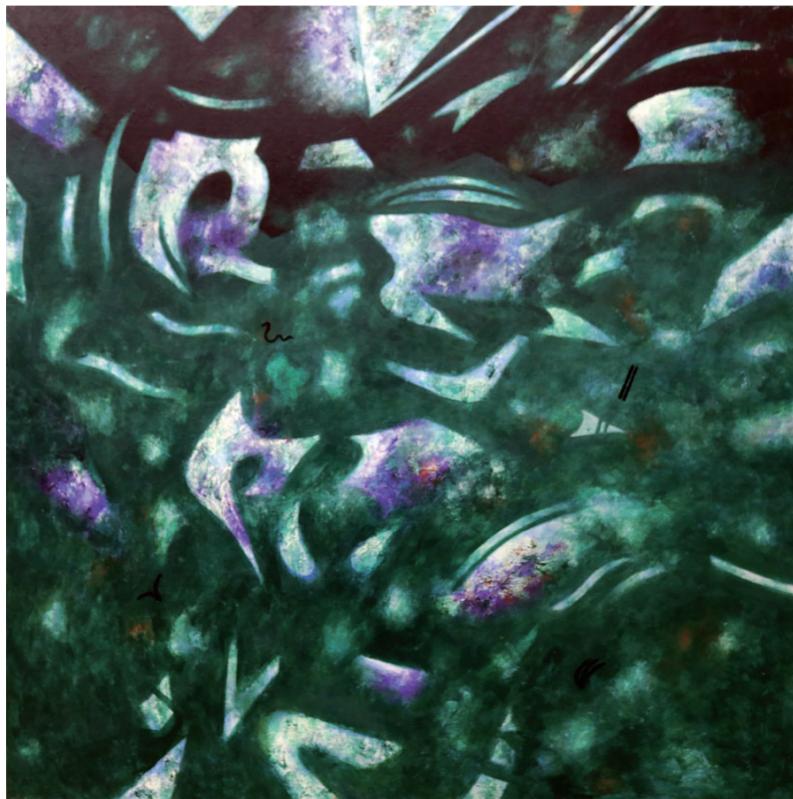
私自身も、先人の想いを受けてコツコツと制作に打ち込み、一人の画家として精進していきたいと思います。



E T

追悼 山口 武君

永 畑 隆 男



深 海

昨年、自由美術展の会期中のことでした。山口君の奥様より十月五日、急性心不全の為亡くなつたとの悲報を受けました。その日は公開研究会や懇親会の日程で事務所の出入りがあわただしく、電話の声もよく聞き取れず一瞬何かの間違いではなかろうかと耳を疑ってしまいました。享年六十九歳でした。彼はずいぶん前から心臓の持病をかかえており大きな手術を二回ほど受けっていました。本展の会期中も一回見に来るのが精一杯のようでした。それなら「近いうちにF氏と一緒にアトリエ訪問に行くよ！」と約束していたのですが、ついに果たされずに逝ってしまいました。

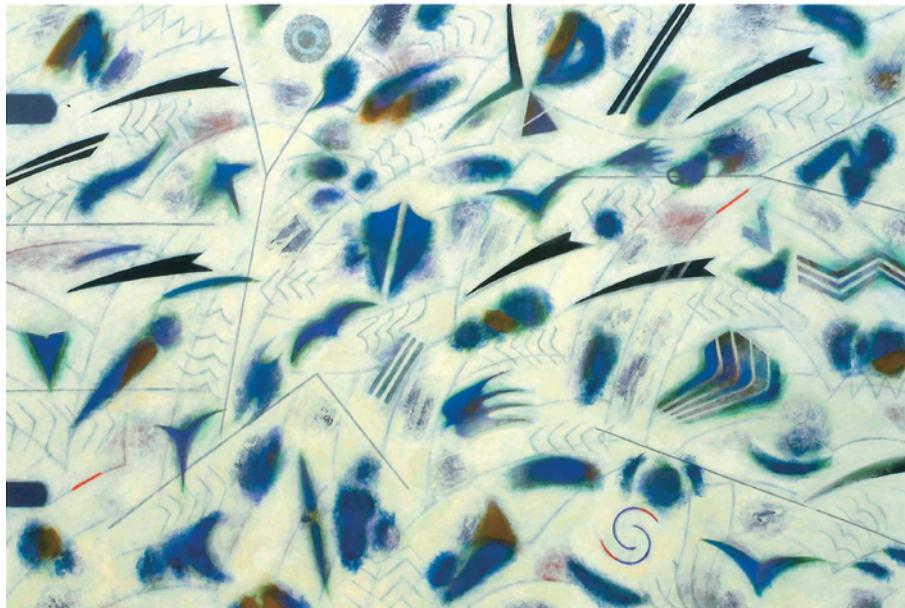
彼の家に行ったのは新築して間もなくの頃だったと思いますが、その後区画整理に合い新

しく建て直したとは聞いてましたが、まだ訪れていませんでした。この追悼文の依頼を受けたこともあり、生前のアトリエ訪問の約束を果たしてなかったので出かけることにしました。それは白い二階建ての立派な家でした。中に入ると吹き抜けの玄関と居間、それと彼が亡くなる当日午前中まで一緒に散歩していた可愛いワンちゃんが歓迎してくれました。アトリエは一階にあり 18畳位ありそうな広い空間、壁面には大小さまざまなキャンバスがたくさん立てかけてありました。窓際には仏壇と遺影とお骨が安置されておりましたのでお線香をあげさせていただきました。たくさんある絵を一つ一つ見る訳にもいかず、奥様にアルバムを見せていただくようお願いしました。すると良く整理された

アルバムが何冊もありました。彼は理系の大学を卒業していたことは知っていましたが高校の化学の先生の就職が内定していたのにその職を捨て絵の道に進んだとの事、初めて知りました。お母様が随分と嘆かれていたそうです。彼とは四十数年来の付き合いで武蔵野美術短期大学部通信教育課程の夏季スクーリングで知り合いました。その後通信を卒業すると前後して武蔵野美術学園の夜間部に通うことになります。澤田先生を慕っていたようで影響も受けていたようです。その頃の写真もたくさんありました。学園を修了するころから僕等のグループ展に参加するようになりました。自由美術展にも僕と相前後して出品するようになりました。会員になったのは彼の方が一年早く2001年で新会員と同時に最初の新入賞を受賞しています。その後僕との二人展や2013年のギャラリー檜B・Cでの同事個展、これが彼の最後の個展になってしまいました。彼は「野鳥を見る会」にも属していたようで小鳥や犬、魚、虫等の生き物に興味があったようです。何度も入退院を繰り返して自分の身体のことで生命に対する造詣

を多方面から深めていったのではないでしょか。アルバム以外に自由美術の展示作品をポストカードにした写真が複数枚あったので一枚ずつ頂いてきました。その中で2011年の「禽獸虫魚図」2014年の「振動」の作品は白地に禽獸、記号化された直線が青や紫で描かれています。このシリーズが何年か続きます。2015年前後に始まる深い緑色のなかに白い生命体のような物が浮遊しているシリーズが2017年の本展に出品した最後の作品まで続いています。僕は個人的には今年の本展に遺作として出品された「深海」が好きです。何か「深海」と言うよりも仁王像の頭部のような気がして仕方ありません。大きな眼を見開いて見る者を見抜く様な四方八方に力がみなぎっています。恐らく命を削るようにして描いたのではなかろうかとさえ思えてなりません。彼の作品はいつも自由美術本展12室のセンターに展示されていましたが、それをこれからは見ることが出来ないのが残念でなりません。心からご冥福をお祈り申し上げます。

2018年11月 白河にて



禽獸虫魚図 2011

個展・グループ展 記録

2018年2月～2019年2月

2018

2/1～10	柳田祐希絵画展
2/2～14	現代抽象作家展 - surprise II-
2/2～14	現代抽象作家展 - surprise 11-
2/5～10	版画家Allumage展
2/12～18	八重洲コンテンポラリー 抽象作家展
2/13～23	満天の星空VI
2/19～24	田中雅子展
2/19～28	BLUE BLUE EXHIBITION
2/19～24	hills展
2/24～3/5	平澤重信個展
2/26～3/3	露口実展
3/5～10	<ミニミニ100選>展
3/5～24	ミズテツオ・寺床まり子二人展
3/6～11	第34回森野会展
3/9～4/29	QUINTESSENCE duo-expo
3/12～17	イブ達の物語VI
3/12～17	美術協会展
3/19～24	大野恵子展
3/21～25	第19回赫展
3/21～28	メロメロアニマルExhibition
3/26～4/13	福田篤展
4/1～3/1	第17期入館作家展
4/3～8	第81回自由美術 広島展
4/3～8	2018 "U展"
4/3～11	醍醐イサム個展
4/4～8	守山幸伸展
4/7～14	さとうえみこ・佐藤直哉 二人展
4/9～14	第8回「個の屹立展」
4/10～15	川口邦子展
4/11～21	Poisson d'Avril 「4月の魚」
4/15～7/16	「水の中にいきづくもの」展
4/16～5/11	伊藤朝彦展
4/23～28	ARTFILE展 後期
4/24～29	第49回 2017 黄人展
4/26～30	前田徳展
4/30～5/6	銀座百華 mini WORKS展
5/1～6	2018中部自由美術展
5/7～12	男だけのアート in 銀座
5/9～19	醍醐イサム個展
5/13～19	久村 進 彫刻と素描 展
5/20～27	第7回東京自由美術展
5/21～26	嘉屋重順子展
5/25～27	2018うつなみ画会展
5/26～6/3	平澤重信展
5/30～6/4	よろづふきこ遺作展
5/30～6/2	Trien Lam TINH BAN
6/4～9	吉見博展
6/6～12	吉田光正彫刻展
6/13～23	橋良子/寺床まり子 二人展
6/13～18	西尾裕展
6/14～20	新宿・自由美術14人展
6/25～30	"U展" 千駄木展
7/4～16	18th アートinはむら展

寺床まり子	
靈山邦夫 村秋木綿 寺床まり子	
笠井順子	
醍醐イサム 深澤義人 古田由美子	
平澤重信	
岸川理子 國定正彦 寺床まり子	
長谷川由美 藤倉久美子 ミズテツオ	
宍戸美恵子 森真	
中野渡みね子	
寺床まり子	
庄司多津男	
寺床まり子	
醍醐イサム 竹内敏江 小山雅子	
平澤重信	
根木達展	
さとうえみこ	
小倉信一	
笠井順子 富高ふきこ	
多胡宏	
相良由紀 寺床まり子 永畠隆男	
中野渡みね子	
宇野之雅 永畠隆男 深澤義人	
小野田 志津代	
寺床まり子	
大野美代子	

画廊 珈琲 Zaroff	
ギャラリー絵夢	
ギャラリー絵夢	
K's Gallery	
ギャラリー八重洲・東京	
あらかわ画廊	
中和ギャラリー	
四季彩舎	
千駄木画廊	
ギャラリー枝香庵	
巷房(3階と地下)	
ギャラリー 晓	
調布画廊	
町田市立国際版画美術館 (市民展示室)	
ギャラリー アーチスト スペース にいざはっとぶらぎ ギャラリー1室	
ギャラリー檜 e·F	
原田の森ギャラリー本館1F	
Bunkamura Gallery	
日本画廊	
八千代の丘美術館	
広島県立美術館	
埼玉県立近代美術館	
Gallery銀座一丁目	
宇都宮文化会館	
ギャラリーストークス	
ギャラリー曉	
ギャラリー美庵	
Galerie VERGER	
中之沢美術館	
日本画廊	
K's Gallery	
広島県立美術館	
菊川画廊	
あかね画廊	
名古屋市民ギャラリー 栄 6・7室	
中和ギャラリー	
ギャラリーストークス	
ゆう画廊	
東京都美術館	
あらかわ画廊	
熊野市民会館	
ギャラリープロッケン	
ギャラリーかもがわ	
Atena Gallery	
ゆう画廊	
高崎高島屋 5階 アートギャラリー	
ギャルリーヴェルジェ	
東広島芸術文化ホールぐらら	
市民ギャラリー	
ギャラリー絵夢	
千駄木画廊	
羽村市生涯学習センターゆとろぎ	

7/5～13	美濃部民子展	笠井順子 伊藤雄人 小暮芳宏 寺床まり子 深澤義人 村秋木綿 依田元明 五十嵐久美子 岸川理子 寺床まり子	ギャラリー・イン・ザ・ブルー 千駄木画廊
7/7～14	綺羅星★展	寺床まり子 田中雅子	中和ギャラリー ギャラリー絵夢 さいとうギャラリー 浪江町地域スポーツセンター ギャラリー檜B・C クリエート浜松ギャラリー31 櫻画廊 画廊楽I 岡山県天神山文化プラザ 第1展示室（1F） あらかわ画廊
7/9～14	夏のシンフォニー展2018	笠井順子	アラカワ画廊
7/10～22	醍醐イサム展	醍醐イサム	ギャラリー 檜B・C・e・F
7/10～15	中條倫子展		隠岩美術館
7/15～30	ガールズコレクション展		ギャラリーくぼた
7/16～21	Drawing Show		秋田さきがけ展示ホール
7/18～22	第40回 静岡県自由美術展		ノイエス朝日
7/23～28	Prints 6 exhibition		善通寺市美術館
7/23～29	坐・琳派展		防府市地域交流センター
7/24～29	第60回東中国自由美術展		アスピラート
7/24～8/4	平澤重信展		砺波市美術館
7/30～8/4	GALLERY HINOKI ART FAIR XX	相良由紀 中野渡みね子	ギャラリー絵夢
7/31～8/12	2018東アジア美術交流展	青木俊子	宮崎ブーケンピア空港 1階
8/6～11	第24回現代美術日韓展	村秋木綿 宇野之雅 小林成行 寺床まり子	オアシス広場
8/9～12	2018年・第54回 自由美術・秋田展		ART SPACE ELICONA
8/18～22	第53回自由美術群馬展		
8/22～26	第45回自由美術香川		
8/23～26	2018山口自由美術展		
8/25～9/23	堀田清塑造展		
8/30～9/9	大谷早苗先生を偲ぶ会展		
9/2～17	第29回 2018 宮崎国際 現代彫刻・空港展	宍戸美恵子 田中雅子 古田由美子 森 真 杉英行	あしがり郷 潬戸屋敷 朝霞市博物館
9/13～23	海の日芸術祭 ガールズ コレクション セレクト展	寺床まり子	ギャラリーとかーる ギャラリーストークス
9/14～23	第3回あしがり美術館		GALLERY MAX NEW YORK
9/15～30	第68回県作品展		Gallery銀座一丁目
9/18～30	則松正年展		ギャラリーストークス
9/22～27	Spiegelbild Teild 1	笠井順子	K's Gallery
9/24～29	TOKYO PIXELS 2018		ギャラリーストークス
9/28～10/3	辻忍展		あかね画廊
9/29～10/4	Spiegelbild Teild 2		ギャラリー絵夢
10/1～6	瀧田紀子展		代官山ヒルサイドフォーラム
10/6～15	はじまりの庭		ボラギャラリー
10/8～14	twice up ! II part4展		深川市アートホール東洲館
10/11～17	まほろば 佐久に咲く 素描展		ぶどうの丘美術館
10/31～11/4	第62回CWAJ現代版画展	杉吉篤 佐々木厚子 高橋靖子 平澤重信 小林美穂 瀧田紀子 藤田和子	SALIOT ギャラリー
11/1～30	西尾裕展	五十嵐久美子	京都市美術館別館 全館
11/1～15	森山誠回顧展		アートカゲヤマ画廊
11/2～28	アルメニアワインから甲州ワインへ	寺床まり子	ギャルリーヴェルジエ
11/5～16	TOKYO PIXELS 2018	醍醐イサム 辻忍	あかね画廊
11/13～18	第82回 自由美術(京都展)	笠井順子	K's Gallery
11/26～12/2	岡本勝展		藍画廊
11/28～12/8	2018ヴエルジエ展		藤屋画廊
12/3～9	柳田祐希 山田かの子 二人展		ギャラリー G K
12/3～15	醍醐イサム個展	醍醐イサム	千駄木画廊
12/3～8	菊池まり子展	醍醐イサム	K's Gallery
12/6～17	Serendipity		金沢21世紀美術館
12/10～15	白と黒の間に展		市民ギャラリーA
12/10～15	アール・デサンブル展		千駄木画廊
12/17～26	2018年ギリギリ展	瀧田紀子 中野渡みね子	
12/18～24	LINK 1988/2018	五十嵐久美子	
12/19～25	21世紀美術交流展	有田敬子 一ノ澤文夫 宇野之雅 小暮芳宏 相良由紀 中野渡みね子 姫井美貴子	

2019				
1/5 ~ 10	WINTER FESTA 2018-2019	平澤重信	ギャラリー枝香庵	
1/7 ~ 12	石田貞雄展		中和ギャラリー	
1/8 ~ 14	第82回 自由美術 名古屋展		愛知県美術館ギャラリー	
1/12 ~ 20	第27回新春現代作家小品展	笠井順子 小暮芳宏 醍醐イサム 寺床まり子 深澤義人 依田元明 岡村光哲	(展示室G・H・I) 千駄木画廊	
1/14 ~ 20	静岡県自由美術		アートカゲヤマ画廊	
1/15 ~ 20	原田楽斎(明)展		ギャラリー MAGATAMA	
1/19 ~ 29	見えた風景・見えない風景		ギャラリー ルネッサンス・スクエア	
1/21 ~ 26	寺床まり子展		中和ギャラリー	
1/22 ~ 30	Tres Mas II	醍醐イサム 平澤重信	ギャラリー絵夢	
1/26 ~ 2/3	ガールズコレクション展	寺床まり子	ギャラリーマスガ	
1/28 ~ 2/2	五十嵐久美子展		あらかわ画廊	
2/1 ~ 10	2月の庭	平澤重信 柳田祐希	ギャラリー枝香庵	
2/3 ~ 4/1	第5回 宇都宮美術の現在展	青木俊子	宇都宮美術館	
2/5 ~ 10	第5回 熊野現代作家展	坂内義之 的場脩二	熊野市文化交流センター	
2/5 ~ 3/21	深井克美展		北海道立近代美術館	
2/11 ~ 17	八重洲コンテンポラリー 抽象作家展-PARTII-	中野渡みね子 深澤義人 古田由美子	ギャラリー八重洲・東京	
2/11 ~ 16	大野恵子展		ギャラリー檜 e·F	
2/14 ~ 19	群来		アートスペース201	
2/15 ~ 24	現代抽象作家展- surprise 12 -	佐藤泰子	ギャラリー絵夢	
2/16 ~ 28	Masako TANAKA	寺床まり子 靈山邦夫 村秋木綿	Galerie SATELLITE	
2/18 ~ 23	hills展		千駄木画廊	
2/18 ~ 23	醍醐イサム個展	宍戸美恵子 森真	ギャラリー G K	
2/18 ~ 27	ブルーブルー展 vol.6	國定正彦 岸川理子 寺床まり子	四季彩舎	
2/25 ~ 3/2	美の棲む処 iact Vol.9	中野渡みね子	ギャラリー暁	
2/25 ~ 3/3	彫刻10人展		銀座アートホール	
2/26 ~ 3/3	美術協会展	醍醐イサム 竹内敏江 小山雅子	にいざほっとぶらざ	
			ギャラリー1室	

◇ 編 集 後 記 ◇

長い冬もようやく終り、早春賦のきかれる季節となりました。

野見山暁治さんの講演「私と自由美術」の記録は本展パンフに掲載予定です。

田垣内愛治さん、山口武さんを偲ぶ文章からは師への友人への深い思いが伝わりました。森山誠さんへの追悼文は本展パンフに掲載します。

小作青史展、一木平蔵展を見ての感想は、佐藤由喜子さん、吉見博さんに早い締切日を無理にお願いして書いていただきました。繰り返し読んでみて二篇とも教えられることが多くありました。

(TES)

《自由美術協会公式ホームページのご案内》

パソコンのインターネット上で自由美術協会の公式ホームページが見られます。

このホームページ上で、自由美術協会の活動内容や詳しい情報が見られます。

(自由美術展、巡回展、佳作賞展、地方支部展、会員の個展、グループ展 等、各展覧会のお知らせ。自由美術展受賞者と受賞作品、会員作品の紹介、他) 国内、海外の一般の方々に巾広く見てもらうことができます。是非ご活用下さい。

☆展覧会情報（DM等）をお寄せ下さい。隨時受け付けています。

（宛 先） 〒182-0017

東京都調布市深大寺元町3-16-7

自由美術協会H P係 相田勤

（メール） mail@jiyubijutsu.org

自由美術協会公式ウェブサイト（ホームページ）

<http://jiyubijutsu.org/>

E-mail

mail@jiyubijutsu.org

（「自由美術」で検索すると見られます）

○2019年度会費納入について

郵便振替払込用紙で、8月20日までにお願いします。

なお、窓口での納入よりATM機納入が安くなりますので、是非、
ATM機での納入をお願いします。払込の際の受領証は大切に保管して下さい。

編 集 自由美術編集部

手 島 邦 夫 西 村 幸 生

高 崎 英 明 川 崎 文 雄

広告・元藤郁子

記録・AD 相 田 勤

発 行 自由美術協会 (<http://jiyubijutsu.org/>)

〒207-0031 東京都東大和市奈良橋3-572-1

TEL・FAX 042-561-1152 田中秀樹 方

メールアドレス office@jiyubijutsu.org